

写真で見える チナウ 綱打ち

綱打ちは毎年、八月の二〇日ごろから、約四〇日をかけて行われる。世界一の大綱だけに、手動の機械や、フォークリフトが使用されるが、より強く、美しく、安全な綱をつくるためには、綱打ちのすべての工程で、丁寧な手仕事が必要となる。

ウフンナ(本綱)製作

材料

ウフンナの芯になる綱は、前年使用したものを、丁寧に整理して保管し翌年に再び利用する。



綱打ち場

昭和四六年の那覇大綱挽復活以来、綱打ち場は幾度か場所を変えた。復活の年は、那覇市古波蔵にあった那覇市の車両管理所の構内で綱打ちは行われた。使い終わった糸満の綱を買い、それを補強、大きくして那覇大綱挽に相応しい綱を製作した。これが第一期目で、昭和五三年まで続いた。

二期目は昭和五四年から六三年までの一〇年間で、国頭村の伊地に依頼しての綱打ちである。稲藁の調達が可能にできるといふ、経済的な理由があつたが、綱の運送、那覇から通つての管理・監督に労力を必要とした。

平成二年から同四年までは、泊港東側の広場を使い、台湾から輸入した藁縄を材料にして綱打ちが行われるようになった。前年使用の芯綱を保管して次の年に再利用、化粧綱で仕上げをする方法もこのときから行われている。これが三期目となる。

泊港の再開発事業によって、綱打ち場の確保が困難になった平成五年から現在まで続けられているのが、米軍那覇軍港内での綱打ちである。

当初は奥武山運動公園寄りの軍施設内だったのを、平成十一年からは、軍港最西端、シーメンズクラブ隣のより広い場所での作業となつていく。

毎年綱打ちの実施にあたっては、米陸軍トリーステーシヨン司令官の特別の許可を得て行われるが、広さといい、綱打ち期間における保全面といふ理想的な場所だといえる。さらには、二〇年以上にわたつて綱打ち場を提供いただいている米陸軍にあつては、那覇大綱挽の歴史と伝統文化を理解し、協力を賜っている事に感謝している次第である。

(那覇大綱挽保存会相談役 東江芳隆)



製作



くずれないように結ばれた大網の胴の部分



網の長さの木のパレットの上に、芯綱を並べていく。芯綱一卷きでもかなりの重量があるため、フォークリフトを使う。

材料

けしようにつな テイトンナ
化粧網・手綱製作

台湾から燻蒸処理して輸入した藁縄を材料にして、化粧網・手綱は作られる。その量はコンテナ一台分にもなる。

藁縄3本をひとつにして小綱をつくる



ひと束10キロ巻きの藁縄





● シチマチ（繁巻） 本綱を化粧綱で細かく丁寧
に巻くことで、大綱は美しく強くなる。この
作業は頭貫の部分から始める。



カヌチの部分も、規定の太さになるまで芯綱を
重ねて、綱本体ができあがっていく。



綱の端は三人で力をこめて絞
めていく。



綱がゆるまないように、加減しながら反対側
まで縄をなっていく。



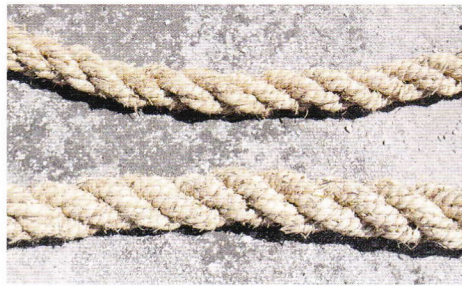
ほどけないように、紐で縛って一巻きの化粧綱・
手綱が完成する。



化粧網を一巻き一巻き丁寧に巻いて、ユングイ（木槌）で叩いて、強く引き締める。



3.3メートルごとに、本綱をロープで縛り、さらに工専用の針金で結束する。



上が化粧網、下が手綱



●ティーンナ（手綱）の取り付け 化粧網よりも太い直径8センチの手綱を決められた間隔で取り付ける。網の上部で交差させ結び、ユングイで叩いて引き締める。



完成したウーンナ（上）とミーナ（下）